

## 韓 昇熹 (ハン スンヒ)

韓国出身

東京外国語大学 総合国際学研究科 博士課程

研究者には割と完璧主義的な性格の持ち主が多いようだ。特に人文系の研究者は実験を繰り返し行うことより、論理的完結性を持つ論文を書くことを仕事にしているため、そのような性格になりやすい。論文とは一種の建築物のようなものである。一つでも穴が開いてしまったら、壊される恐れがあるため、大きな建築物に相当な時間とお金が必要なことと同じように、論文作成にはかなり時間と努力が費やされる。研究者は、論理的完結性を保つためには何度も推敲を行い、どのような批判にも耐えうるようなものに論文を仕上げる。しかし、いくら推敲をしたものだとしても、違う視点から見た場合に欠点を見つけられることは当然のことだ。完璧主義者の場合は自分の計画とは全く違うことが現実生じた場合にパニック状態に陥りやすい。完璧主義と言われるほどだから、その完成度の高さは保障されるが、パニックの状態に素早く適切な対応ができないことが弱点である。

私は、今まで自分が完璧主義と思ったことは一度もなかったが、今年初めて自分のなかに完璧主義という性向があることに気づいた。去年は、年初からコロナの発生で他の人と同様になるべく外出を制限し、大半の時間を家で過ごすことになった。予定されていた発表は無期限延期となり、毎月参加していた研究会はすべて中止で、いきなり一人ぼっちの生活が続く中、極度のストレスが私を襲った。留学生という身分は、こういう時に一番不利な状況に置かれてしまうことを実感した。その年の計画のすべてが壊された気分となり、一時期何をすればいいかわからない時期が続いて本当につらかった。いきなりアルバイト

先からクビになって経済的な困難を経験した留学生が多いようだったが、幸いなことに同財団から奨学金を受けていたため、そうなる心配はなかった。この場を借りて国家的に厳しい状況が続く中、支援を続けてくださった坂口財団の関係者様に改めて感謝を申し上げたい。

一時期何をすればいいかわからない時もあり、周りに心配をかけたが、周りの人々の温かい支援を受け、徐々に通常のペースを取り戻した。去る1年を振り返ってみれば、去年は日本の論壇にデビューした年である。YouTubeやブログなど、ネットを基盤とする媒体の爆発的な成長によって、雑誌自体があまり売れない状況なので、影響力が大きいとは言えないが、出版社から依頼を受けた原稿が雑誌に掲載されたということは私にとって大きな意味を持つ。不特定多数の日本人一般に向けて私の発言が届く通路が開かれたことを意味するからである。その雑誌の編集者は知り合いの紹介で、私が2019年度に初めて書いた学術論文を読み、その内容をもっと多くの人々に知らせたいという考えを持つようになり、私に原稿を依頼したのである。2019年度に学術論文が所属する大学の研究所の紀要に載った時は、研究者として一歩踏み出したという喜びはあっても、まだまだ未熟な部分が多いので、このように早く私の論文に対する反応が知らない人から出るとは思わなかった。

また、去年初めて学外の学術雑誌に投稿した論文が掲載されたことも記録しておくべき成果である。大学院生は学内の紀要が学外より相対的に査読が厳しくないなので、学内紀要に投稿することを好む場合が多い。私の場合も、初め

て書いた論文は査読付きの学内紀要に投稿した。初めて書いた論文の反応が予想より良かったため、自信をもって学外の学術雑誌に論文投稿を試みた。

二段階のステップとして学外からも論文投稿を募集する大学紀要を投稿先として選んだ。他大学の紀要を二番目の投稿先として選んだ理由はいくつかある。まず、学会誌の場合は学雑誌ごとに好むテーマや方法論があり、それに合う論文が掲載されることが多い。そして、投稿する論文の数に比べて掲載される論文の数は圧倒的に少ない。つまり、掲載される確率が相対的に低いということだ。それに対して他大学の紀要の場合は、投稿された論文が専門家の審査を経て掲載許可をもらえば、特に問題がない限り、掲載される。また、学会誌に比べて相対的に応募者の数も少ない。そのような戦略をとって学外の研究紀要に投稿したところ、予想より厳しい査読に驚いた。大学の紀要の場合はその大学に属した教授が査読をすること多いが、私の論文の場合は適任者がいなかったのか、外部に査読を依頼したように見えるコメントが届いた。私と同じようなテーマで論文を書いた人は私以外に一人しかいないが、コメントの専門性からみてその先生が査読をした可能性が高かったようだった。専門性の高いコメントを受けたため、論文の完成度は一層高くなり、より論理的で論旨が明確になった。学外からも私の研究を認められた気がして、大学院で研究をやり始めて5年目によく研究者として出発したように感じられた。

去年達成した3番目の成果は、2人の日本人研究者と一緒に共同論文を書き上げたことである。博士課程に入ってから参加した研究会のメンバーたちと分担執筆を行い、何回もZoomを通して意見交換を行って論文を書き上げた。私としては日本人研究者と一緒に論文を書く機会を得たということで、自分の日本語能力を認められた気がして嬉しかった。このような調

子なら、博士論文もすぐに書けそうな気がした。

去年はコロナ感染を恐れてできるだけアルバイトもせず、奨学金と貯金で生活をするため努力したが、たまたま友達の紹介で日本軍の公文書を書き写すアルバイトをしたこともあった。このようなアルバイトは本来日本語ネイティブに回る仕事であるが、分量が膨大であるため、できるだけ多くの人々に協力してほしいとのことで私も参加したのであった。高額のアルバイトということで迷わず引き受けたことが間違いだった。韓国語で書かれた崩し字も読むのが得意ではないが、日本語で書かれた崩し字は想像以上に読解が難しかった。その崩し字の読解に費やした時間をお金で換算すれば、それほど高額ではないかもしれない。しかし、普段現代文しか読まない私にとって日本軍の公文書の書き写しバイトは独特な日本文化体験として印象に残った。

コロナによるパニック状態も一時期続いたため、博士論文を3年間で書き上げることは残念ながらできなかった。博士課程4年目には、磨いた実力を持って今度は学会誌に論文投稿を試みるつもりである。そして、投稿した3本の論文をベースにして博士論文の執筆に取りかかる予定である。無事に博士論文を今年中に書き上げれば、地域と国を問わず、どこでも研究生活を続けてやりたいと考える。できれば、韓国に帰国して日本留學生活中に作り上げた人的ネットワークを使って様々な学術シンポジウムを企画し、日本の政治・社会・文化を勧告に広く深く知らせる役割を担いたいと考えている。

2021年2月